

## 第三曲：市場経済の逆襲

原作：金盛 長

(詩人、静かに登場)

ある人が自由を求め  
見えた空気は光に満ちていた

人々がより多くの自由を求め  
求めた人々はより明るい陽を見た

みながさらに自由を求めたとき  
自由はとうとう底をついた

最大多数が最大幸福を求め  
みなは暗い洞窟でゲームに熱中していた

(詩人、静かに登場)

登場人物： 新月 位     : 経済学教授  
          間占 通     : 経済学講師  
          森々 元気   : 大学院生  
          鹿鳴草 しづく : ナレーター

2001年2月19日

[状況設定: 想定される場所はI県の、建物は立派と評判であった大学の一経済学研究室。登場人物の新月位(しんずきくらい)は過去には多くを期待されていたが現在は殆ど学会から忘れられた存在。間占通(はざまじめとおる -- まわりからは「まじめ」と呼ばれている)は現在売り出し中の若手経済学者。森々元気(もりもりげんき)は研究を始めたばかりの優秀な大学院3年生。森々は少々羽目を外すところがあるが、その素直な性質から新月と間占にかわいがられている]

(ナレーター): [何ですか、今回のタイトルは！ 火を噴く大きなカメの話みたいです。ただ、カメでなく市場経済となっています。それに、逆襲というのは目的語が必要です。何に對しての逆襲なんですか。聞いていけば分かるでしょう。まあ、聞きましょう。ところで私の名前は“ろくめいそう”でなく、“かなくさ”と読みますのでよろしく]

## 第一幕：市場均衡理論と社会的ディレンマ

(間占、少し陰鬱な表情で研究室に現れる)

新月：間占君、元気がないようですが、どうかしましたか。

間占：このところゲーム論に疑問を感じてきてしまって、少し悩んでいるんです。先生、幾つか聞いてもよろしいでしょうか。

新月：そりゃ研究者なんだからいろいろ疑問を感じるのが当たり前で、むしろ良いことでしょ。よかったじゃないですか。

間占：また先生は茶化そうとする。僕は真面目に話しているんですよ。

新月：いつもの悪い癖が出てしまいました。すいません、真面目に聞きます。

間占：簡単に言うと、ゲーム論と市場均衡理論の關係に強い疑問を感じてきてしまったんです。<sup>1</sup>

経済学会の中で、あるいはもう少し狭く考えてゲーム論や数理経済学者の間では、環境問題とか社会問題とかを考察したり分析したりするにはゲーム論が役立ち、市場均衡理論、つまり完全競争市場の理論はあまり役に立たないと考えられています。僕の研究もゲーム論の授業もそういうスタンスでやってきました。

しかし、良く考えてみると、これは少し違うのではないかと思えてきたんです。先生の言う逆転がここでも起きているのではないかと思えてきてしまったんです。それで先

---

<sup>1</sup> ここでいう市場均衡理論は経済学では普通「一般均衡理論」と呼ばれている。ここで「一般均衡理論」という名称を使わない理由は本編の第一曲から推測される。

市場均衡理論に關しての最近の標準的教科書として、「ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ」(奥野正寛・鈴木興太郎著、岩波書店(1985・1988))がある。

生に僕の考えを聞いて欲しいのですが。もし変だったら直してください。

新月：なんだって？ ゲーム論と市場均衡理論の逆転？ そりゃ面白そうだ。

森々：ホントーですか。僕も聞きたいなあ。間占さん早く始めてください。

ゲーム論と市場均衡理論が逆転したら、僕は市場均衡理論家になるべきか。

間占：こっちは真面目に悩んでいるっていうのに、僕の話をもそんなに期待しないでください。でもなんだか、自分でも面白いかも知れないと思えてきました。

森々：では間占さん、分かり易くお願いします。

間占：えーと何から始めればいいんでしょうか。

ここは新月先生のやり方を真似しよう。森々君、市場均衡理論を要約して頂けますか。

森々：僕を論理展開のエンジンとして使んですか。まあ、いつもは間占さんがその役をやってくれるので、今日は僕がやってみます。

たしか学部の授業で新月先生は、市場均衡理論に関して「市場均衡理論の論理的構造の骨組みはたったの三つであって、教科書には細かなことがいっぱい書いてあるが、骨組みが大事で他のことは些末な事と思え」と言ったと覚えています。

それを聞いて僕はびっくりしました。だって他の先生達は市場均衡理論の骨組みなんて話さないで、その他の事ばかり教えていましたから。

間占：新月先生の講義らしいな。

その最後のせりふは、アインシュタインの言葉といわれる“ I want to know God's thoughts ... the rest are details” 「私は神の考えが知りたい ... 残りは些末な事だ」から借りたんですね、先生。

森々：あの過激なせりふも借り物か。おどろいたー。

ただ、先生は細かなことにも随分と神経質だと思いますが。

(新月、少しむっとして)

新月：私は「細かなことはやるな」と言っているのではなく、「細かなことを正確にするのは当たり前で、全体の問題や構造も正確に考えましょう」と言っているんです。

音符が読めない音楽家とか、デッサンがへたな絵描きとか、論理的思考の出来ない学者とか、そういう人たちに存在価値があると思いますか。プロとして問題になるのはそ

これらの当たり前の部分が正確にできて、その後は何をするかでしょう。だから、そのあたりが甘い人には細かいことまで注意するんですよ。

間占：まー、先に進みましょう。

森々君、まずその三つの骨組みというのをおさらいして下さい。

森々：えーと、黒板にそれを書くと

- (1)：消費者行動（予算制約のもとでの効用最大化行動）の理論
- (2)：生産者行動（利潤最大化行動）の理論
- (3)：市場の価格調整の理論

となります。(1)と(2)では、個々の消費者や生産者の行動は価格に全く影響しないとするが、(3)においては消費者と生産者の行動の総和が価格を決定するのだと強調したと思います。つまり、(1)から個人の需要関数がでてきて、それらを消費者全体に関して総和すると市場需要関数が導出される。また(2)から個々の企業の供給関数がでてきて、それらを生産者全体に関して総和すると市場供給関数が導出される。

そして、市場需要と市場供給の値が一致するように市場価格が上下し、最終的に均衡に落ち着く。それが(3)の内容です。アダム＝スミスの「神の見えざる手」が均衡に導くというのは(3)の事だと思います。

新月：大体それでよいと思います。ただ「神の見えざる手」というのは、(1)から(3)のすべてと対応させ、体系全体として安定な均衡あるいは「予定調和」の結果に収束することを意味すると理解した方が良いでしょう。さらに、個人が自分自身だけの利益を追求していても、経済全体としては調和がとれ、経済全体がより良くなるだろうというのが、アダム＝スミスの強調点でしょう。

理論の構造に関して注意しておくべき点は、個人レベルと市場レベルでの価格の取り扱いが全く異なることです。

森々：思い出した。先生は授業でさらに以下のことを強調しました。

個々の消費者行動あるいは生産者行動のレベルと、市場全体のレベルでの価格の取り扱いが全く異なる。この価格の取り扱いの違いが、完全競争の本質なのだと言いました。

(1)と(2)の部分に関して、普通は「個々の消費者や生産者は価格を与件とする」と表現します。これは「消費者も生産者も数多くいる」という仮定から導出されます。この「多人数の仮定」のもとでは、個々の消費者や生産者は価格への影響力を持たないということです。

こんなところだったかな。それで「あとは些末な問題が残ります」とかなんとか言って、先生は授業を終らせてしまった。

新月：あ、あれは時間が無くなってしまったからですよ。

森々：そうだったかな。まあ、もう少し話を続けてみます。

それで市場均衡理論に関しては、他の先生の授業で厚生経済学の第一基本定理と第二基本定理が成立すると習いました。第一定理というのは、市場の構成員である消費者・生産者の全員をより良くすることはできないという意味で、市場均衡による資源配分はパレート最適であるというものです。<sup>2</sup>

問占：パレート最適性についてもう少し正確に言い直すと、生産技術をどのようにうまく使おうとも、その経済で生産された財をどのように再配分しようとも、経済の構成員の全員の効用を増加させることができないということです。

森々：はい、そのほうが少し正確です。

問占：大分正確と思いますが。

新月：それからパレート最適性は平等性に関しては何にも述べていない事を注意すべきでしょう。例えば、ある人がすべての財を独占しようとも、経済全体で無駄がないときはやはりパレート最適である。

問占：それは大事な注意ですが、僕が議論したい問題に直接は関係していません。ですから、森々君、第二基本定理に行ってください。

森々：分かりました。えーと第二基本定理というのは、任意のパレート最適な財の配分が所得の適当な再分配により市場均衡として達成されるというものだったと思います。こんなところでしょうか。ただ、授業を聞いていて、これらの定理がなぜ厚生経済学の第一基本定理とか第二基本定理なんていう偉そうな名前と呼ばれるのかは分かりませんでした。

新月：うん、全体としては良くまとまっているね。それで問占君は何に悩んでいるのかい。

---

<sup>2</sup> 「ミクロ経済学 II」(奥野正寛・鈴木興太郎著、岩波書店(1988))、第17章を参照。

問占：僕が悩んでいるのは、森々君が最後に言ったことと関係しています。まず厚生経済学の第一基本定理と第二基本定理なんて、そんな風と呼ばれるだけの中身があるのかという疑問です。僕自身、これらの定理なんて簡単に証明できるし、経済学的内容だってほんの僅かだと思っています。それで、僕が悩んでいるのは、以下のようなことです。

こんなのが中心的定理になっているので、市場均衡理論は役に立たないと批判され、現在、地球規模で起きている環境問題や諸々の社会的な問題を考察するのに全く無力と思われるわけです。だって、そうでしょう。市場均衡理論が取り扱えるのはパレート最適な結果を生む市場経済だけだからで、現在の環境問題はそれから逸脱していることは明白なんです。

森々：えーと、環境問題って、例えば、地球温暖化、フロンによるオゾンホール拡大、都市の大気汚染などを意味しているのですか。

問占：そうです。そういう地球規模の環境問題を考えています。

森々：そのような環境問題がある経済の結果はパレート最適にはならないのかな。

問占：問題によってはパレート最適な配分からの単純な逸脱というより、パレート最適な配分から極端に離れると思われれます。

しかし、一方、厚生経済学の第一基本定理によると市場均衡理論の結果はパレート最適である。つまり、環境問題などは市場均衡理論とは相容れない。それゆえ、市場均衡理論は環境問題などの考察には全く無力だと思われるわけです。

森々：だけど、そういう環境問題に関してはゲーム論的研究が行われているじゃありませんか。環境問題はゲーム論の「囚人のディレンマ」あるいは「社会的ディレンマ」として見ればいいんじゃないかな。一般にゲームでの結果はパレート最適にはならないし。

問占：その通りと思います。ゲーム論に出てくる均衡は殆どの場合パレート最適にはならない。それで環境などの社会的問題はゲーム論が有効だろうと期待されてきているわけです。

ゲーム論の結果がパレート最適にならないって言ったって、寡占の理論のようにパレート最適性からの小さな逸脱で、寡占企業の数が増えれば近似的にはパレート最適性が達成される場合だってあるわけです。しかし、現在地球規模で起きている環境問題は、人口が増えれば増えるほど問題は深刻になり、パレート最適性の反対の極が出てくるのだと思います。

それにゲーム論が期待されたって、それは市場均衡理論がだめだからという消去法的

理由で、ちっとも積極的な理由じゃありません。

森々：消去法でも残らないより残ったほういいんじゃないじゃありませんか。

間占：それに基本定理も単なるひとつの定理と見ればそれなりの結果と思うのですが、それが“基本”定理だなんて言われるとバカバカしくなります。

僕達経済学者が直面している社会経済状況というのは実はもっと深刻で、市場均衡理論が対象としようとしている問題自体は、現在の社会問題を考察する上で非常に重要と思われるわけです。

森々：間占さんの話は同じものを否定したり肯定したりで、結局どこに話をもって行きたいのかがちっとも分かりません。

新月：だから間占君は悩んでいるんですよ。

ひとつの理論に、否定したい側面と同時に肯定したい側面があるとしましょう。その理論の否定的部分だけ見て、その理論全体を否定するのは簡単ですよ。理論というのは現実のすべてを忠実に描写するものでなく、問題にしたい部分に着目して他の多くを捨象するわけです。このような捨象があって初めて問題にしたい現象の分析が可能になる。だから、どの理論も総体としてみれば否定的側面はあるはずで、さらに目的や対象が少しずれば、理論に強く否定的側面が現れるのはしょうがない事なんです。

さらに、新しい理論を構成しようとするとき、それがどんなに新しいものであろうと既存の理論や考え方に基づいています。これは原理的に避けることが出来ません。だから、新しい理論を構成しようとする場合に、既存の理論の否定的側面を吟味して、それを修正していくという方法を取るしかないんです。

この場合、その理論の各々の部分を正確に評価して再構成しなければならないので、大変な作業になるんですよ。

間占君は市場均衡理論を基にして、そういう作業に入るべきかどうかで悩んでいるんですよ。

間占：そうだと思います。ただ、僕自身に問題がまだはっきり見えてこないんです。だから、先生に話を聞いて欲しいと言ったんです。もう少し市場均衡理論とゲーム論の関係についての議論を続けさせてください。

新月：それなら、今日はひとつ私が肯定派になって話を聞くというのはどうですか。私自身、市場均衡理論に対しては否定的傾向が強いので、肯定派に徹し切れないかもしれないんですがやってみましょう。

それで間占君の話のあと、私自身の問題として、市場均衡理論の認識的側面と社会制度論的側面を議論しようと思います。

森々：これはどうなるのかな。僕は否定派につけばよいか肯定派につけばよいか、それが問題だ。

新月：そろそろ昼なので、議論の前に腹ごしらえをしよう。

ただ、ひとつ注意を付け加えておいたほうがいいな。

大学院の授業では言ったと思うのですが、市場均衡理論には動学と静学という分け方があります。動学というのは時間を明示的に含んだ理論であり、静学は時間を含まない。

巷では「動学のほうが静学より一般化された理論である」と言いますが、これは必ずしも正しくない。

森々：先生、それはこの間長い議論をした「特殊と一般の逆転」のことですよ。<sup>3</sup>

新月：あれ、それはもう話したのか。ところで私は何を注意しようとしたのかな。

そうそう、注意したかったのは、明示的には時間を含まないとされる静学理論が、実際に時間を含まず、市場の取引がたったの一回だけ行われる状況を表しているわけではないということだ。つまり、考察の対象としている経済にはもちろん時間の経過があり、そこでは取引が繰り返し行われている。静学理論というのは、そのような繰り返しの状況で定常状態を考察する。定常状態だから時間を明示的には考えなていないだけなんだ。

間占：先生、その注意は当たり前聞こえるんですが。少し古い本で言えば、ヒックスの『価値と資本』ではそういう形ではっきりと経済と市場取引を記述していたと思いますが。<sup>4</sup>

新月：ところがだよ、最近の市場均衡理論分野ではそういう理解と全然違う考えをする人がいるんだよ。静学理論というのを、本当に取引が一回しか行われないものとする。

これはゲーム論でよく行われる一回だけのゲームでの意思決定を考えるという問題設定に影響されてしまっているんでしょうか。全く、こんな連中は経済学者の風上にも置けない。

森々：肯定派で行こうと言ったくせに、もう否定派になってしまった。

---

<sup>3</sup> 第一曲：経済学における特殊と一般の逆転。

<sup>4</sup> 『価値と資本』(J. R. ヒックス (安井琢磨・熊谷尚夫訳) 岩波書店、(1951))。

間占：うん、でも静学の背後にも時間はあるという注意は重要ですよ。多分、先生の認識論的側面の部分で関係してくるんでしょう。

新月：そうか。もう少し待つべきだったんだ。

とにかく、昼飯に行きましょう。それから間占君の話はそれからゆっくりと聞きましょう。

(ナレーター):[間占君の悩みは完全競争市場の逆襲と関係あるんでしょうね、全然見えてきませんが。また長い話になりそうなので、私も何か食べてこようっと]

## 第二幕：「市場の失敗」と広域的外部性

(三人、昼食から帰ってきて議論を始める)

新月：さて、僕は肯定派だったから、厚生経済学の第一基本定理は重要であると論じてみます。第二基本定理の方はどんなに詭弁を使っても重要だと主張するのは無理でしょうけど。

第一基本定理は社会制度をうまく設計すればパレートの意味で無駄のない経済状態を達成できると言っています。

それにはまず市場が成立するよう条件を整備します。例えば、私的所有権を認め遵守する、つまり、自分の財はどのように消費しようと、どのように生産に使おうと法的には自由である。そして、その権利が他人に侵されないことが保証されなければならない。

経済的自由が法的に保証されただけでは、消費者と生産者は、必ずしも各人の効用や利潤を最大にするような行動をとるは限りません。例えば、伝統とか社会慣習などの縛りがあると自由な経済活動をすることが出来なかつたりします。ですから伝統とか社会慣習といったような個人の行動を縛るものがない状態にすることも必要です。

ですから各個人あるいは各企業という経済主体が社会全体には影響できないようにします。さらに社会から縛られることも無いという意味での、経済主体にとっての実質的自由が確保される必要がある。

森々：各個人が社会全体には影響を与えないというのは、午前中に議論した「多人数の仮定」ですか。これに加えて各個人は法律的にも実質的にも自由に行動できることが必要

なんですか。

新月：そのとおり。比喩的に言うと、社会全体を大都会みたいにするわけです。大都会で個人は殆ど無視される存在ですが、社会から干渉されないという意味においては自由である。そこでは伝統的美徳からも自由である。

森々：なんだか、肯定派であるか否定派であるかが分かりませんが。

新月：いや、これでいいんですよ。

ただ、いつまでも肯定派と偽っていてもしょうがないので、これからはいつもの自然体で行きます。

森々：やっぱり先生は自然体がいいや。ただ、自然体イコール否定派みたいですけど。

新月：なるべく、そのイコールが成立させないようにしないとイケない。

さて、このような社会制度を作り出せば、そこでの市場による経済活動の結果はパレート最適になる。つまり、生産活動にも交換活動にも非効率性がまったく無い状態になります。それが経済学でいうパレート最適性というわけです。

厚生経済学の第一基本定理はこのような形で、社会・経済制度の設計を論じるときに使われます。具体的には、社会経済の問題はなるべく市場経済に任せるべきだ。そのためには、社会経済制度を整備すれば良い、ということです。このように、厚生経済学の第一基本定理の内容は、その名前をよく反映しているんですよ。

森々：そうか厚生経済学の第一基本定理はそういう内容を持っているのか。すると確かに厚生経済学的内容を持った定理なんですね。よく分かりました。

間占：森々君、新月先生に騙されんじゃないの！

でも、肯定派と言ったって殆ど否定派みたいな説明ですから、否定派の僕としては話を続けるのが楽になりました。先生の議論の中には問題の本質がありますが、それをうまく誤魔化して肯定的な結論を導いているんですから。

森々：えー間占さん、何が不満なんですか。

間占：新月先生の説明はあれでいいんですよ。

ただ、基本定理の成立には、個々の消費者の効用は自分の消費だけに依存して決まり、生産者の利潤は自分の生産量と市場価格だけで決定されるという、個人主義的な仮定が

必要になります。だから、環境問題などには適用できません。

森々：だからゲーム論が必要なのか。

間占：経済学の現状はそういう風に繋げるんですけど、僕はそういう風には繋げたくないんです。市場均衡理論はこういう問題の研究に関してもっと大きな可能性があると思っているのです。

先生の説明の中で、市場均衡がパレート最適になるという結論を得るには、外部性がないという仮定が必要です。ところが現在の社会経済で外部性が無いなんて考えられません。アダム＝スミスがいた18世紀においては地球の規模は人間の活動と比較して殆ど無限大だったんですが、現在は地球から人間があふれようとしているんですよ。

それに大都市のような社会制度をつくれれば良いと言ったって、大都市では大気汚染が深刻な問題になるわけです。これが外部性の問題です。

だから、第一基本定理は「もし外部性が無い状態ならば、市場均衡はパレート最適になる」という定理になります。

森々：間占さんはその仮定を明示しろと言っているんですか。

間占：まずは仮定を明示して、そして厚生経済学の第一基本定理なんて偉そうな看板を引っ込めるべきだと思います。

新月：まあ、偉そうな定理の名前を偉そうでない名前にするかどうかは忘れて、もう少し内容の話続けましょうよ。

まず外部性というのが何であるか、から始めましょう。

森々：えーと、経済学の教科書に従うと「外部経済」・「外部不経済」と「市場の失敗」とと一緒に議論されるんじゃないかな。

ただ僕が習ったのに従うと、「外部経済」あるいは「外部不経済」の代表的例は「養蜂業者とりんご園」とか「洗濯屋と隣のパン屋」なんて話で、現在の環境問題なんて議論されませんでした。<sup>5</sup>

「市場の失敗」というのは、あまりはっきりと議論されなかったな。「洗濯屋と隣のパン屋」の例では、パン屋が煙を出して洗濯屋の干し物に煤がかぶるとというのが外部不経済で、その外部性に関して市場取引は行われない。それが「市場の失敗」だなんていう説明だったかのような気がする。なんか変だな。

---

<sup>5</sup> 外部性に関して「ミクロ経済学II」(奥野正寛・鈴木興太郎著、岩波書店(1988))第32章を参照。

新月：そう「市場の失敗」は、“Market Failure”の日本語訳ですが、下手くそな訳ですね。“Power Failure”は「停電」であり、「力の失敗」とか「電力の失敗」とかなんて訳しませんよね。

変な日本語でも使っていると段々と愛着が生じてくるんでしょうか。誰も直そうとしない。まあ、しょうがない。私も「市場の失敗」に段々愛着を感じてきました。

森々：先生は間占さんにいつもイヤミだと言われるので、今日ほうまく誤魔化したんですか。

新月：いかん、森々君にも見破られてしまった。

それで、「外部性」つまり「外部経済」・「外部不経済」と「市場の失敗」のあの古典的説明は困りものですよ。まず「市場の失敗」は二つに分類すべきだと思います。それを板書しておこう。

(4)：市場は財の取引の場としては機能するが、市場取引の結果がパレート最適性を達成しない

(5)：そもそも財取引の場として成立しない。

「洗濯屋と隣のパン屋」の例では、きれいな空気に対して権利を洗濯屋に与えても、その権利の取引の場としての市場は成立しない。だって、当事者は二人だけであり、さっき議論した完全競争市場の成立要件を満足しないはずですよ。これは(5)の例と考えるんでしょう。

間占：教科書では、所有権を明確にしたあと、当事者同士の交渉に任せれば良いなんて議論が続きます。それがコースの定理と呼ばれるものです。<sup>6</sup> この定理では市場の問題にならない紛争でも、当事者同士の交渉によってある程度解決されると主張しています。直接参加型の民主主義的解決法と解釈するようです。

これはこれで良いと思いますが、ただ僕自身はこんなのはあまり重要だとは思えません。たしかに「洗濯屋と隣のパン屋」の問題に象徴される局所的な紛争は当事者同士の交渉で解決されるかもしれない。

しかし、現在の深刻な環境問題などの多くはこのような局所的問題ではなく、もっと広域的な問題だと思います。広域的問題は多くの人々を巻き込んでいきますので、広域的

---

<sup>6</sup> 「ミクロ経済学 II」(奥野正寛・鈴木興太郎著、岩波書店(1988))、第32章を参照。

問題の解決のためには当事者の交渉が役に立つようには全然思えません。だって、広域の問題では各個人は殆ど無視される存在なんですから。

新月：局所的な環境問題でも深刻なものは沢山ありますよ。水俣水銀公害のような問題では、大きな単一の加害者と小さな多数の被害者の対立があっても、当事者同士の交渉というのは全く平等ではありません。当然、交渉では大企業のほうが小さい多数の被害者より圧倒的に有利になる。なぜなら、小さな多数の被害者が団結するのは大変だし、大企業が被害者達を分断したり切り崩したりすることも簡単ですし。

ところで、森々君、トルストイを知っているよね。

森々：えー、トルストイ？ ロシアの革命家ですか。

間占：ファファファ、全く教養が無いんだから。19世紀のロシアの文豪ですよ。

森々：そんなにバカにしないでください。僕が読んだ経済学の教科書にも論文にも文学の話なんて一回も出てこなかったし、そもそも経済学を勉強するのに文学なんて役に立つんですか。

間占：あっそうか、危うく文学の話に乗せられるところだった。先生はなぜトルストイの話を始めようとしたんですか。

新月：ごめん、ごめん。別に森々君の教養を確かめようとしたわけでもないし、文学が経済学あるいは社会科学に役に立つかどうかを議論するつもりでもなかったんですよ。トルストイのある言葉を引用したかったんです。

トルストイの『アンナ・カレーニナ』の書き出しのせりふ「幸福な家庭はみな同じように似ているが、不幸な家庭は不幸のさまもそれぞれ違うものだ」がそれです。これを「大きな単一の加害者と小さな多数の被害者」間の交渉の問題に応用してみます。

水銀という同一の原因が不幸の大元といっても、それによって様々な不幸の形態がつくられます。その人たちの団結は、企業の存続だけを目的とした少数の人たちの団結とは比較できません。

(新月、カブキ調で見得を切る)

幸福な人たちの団結でも難しいというのに、なかんずく、多くの不幸な人たちの団結なんて殆ど不可能に等しいぞ。

だから、当事者同士の交渉に任せていたら、被害者側に特別な指導者あるいは支援者でもない限り、大企業は僅かな補償額で被害者達の合意を得て、公害問題を片付けてしまう。

森々：それがトルストイの定理の応用ですか。文学も経済学に役に立つことがあるのか。

間占：うーん、面白い話ですね。

ただ、今は市場均衡理論との関係で外部性を議論したいと思いますので、あまり話を脱線させないようにしましょう。

森々：じゃ間占さんの話に戻るんですね。

すいませんが、“広域的”という言葉の意味がいまひとつ良く分からないので、もう少し説明して下さい。

間占：“広域的”というのは、外部性が広域に広がっていて、個々人はその外部性の水準に全く影響を与えない考えるが、全体は個々人に影響を与えるというものです。もちろん、個々人の活動の総和が全体の水準を決めるんですが。

だから、外部性を発生させる主体の数が非常に多い場合を指しています。

大都市の例で言えば、大気汚染が外部性で、各個人の自動車の排気ガスは、その都会での大気汚染の総量に比較すれば殆ど無視できるが、社会全体で大気汚染がひどくなれば各個人は健康被害を受けます。しかし、自分の車の排気ガスが直接の原因であると考えられるわけではありません。

広域的な外部性というのは、「完全競争で個人は価格を与件とする」と同じ構造を持つことをここでは強調したいんです。それで、実は広域的な外部性というのは完全競争と並存可能なんです。<sup>7</sup>

森々：分かりました。個人と広域的な外部性との関係は、完全競争において価格と個人との関係と似たものなのか。

間占：その通りです。広域的な外部性は市場での取引の対象にはなりませんが、広域的な外部性は完全競争市場と並存可能で、直接・間接に市場経済と関係しています。

えーと、まず、広域的な外部性があっても、取引の場としての市場は成立するとかんがえられます。つまり、市場は取引の場としての機能を停止しない。つまり、「市場の失敗」

---

<sup>7</sup> 広域的な外部性と市場均衡理論に関しては以下の論文を参照： P. Hammond, M. Kaneko and M. H. Wooders, “ Continuum economies with finite coalitions: core, equilibria and widespread externalities ”, *Journal of Economic Theory* 49 (1989), 113–134. M. Kaneko and M. H. Wooders, “ Widespread externalities and perfectly competitive markets: Examples ”, (with M. H. Wooders), *Imperfection and Behavior in Economic Organizations*, eds. R. Gilles and P. Ruyes, Kluwer Academic Publisher, (1994), 71–87.

があってもそれは新月先生が板書した(4)の意味に過ぎないと思います。

例えば、大都市において大気汚染がひどい状態でも、住民の健康にそれほど支障がない範囲では住民や企業は彼らの経済行動を変化させない事がよくあります。この場合、住民の効用は実際には下がっていても、経済行動そのものは大気汚染に影響されません。

新月：間占君の話の続けると、経済構成員の経済行動は変わらないが、住民の効用は下がる、あるいはひどく下がってしまうこともあり得るわけだ。つまり、市場均衡の結果はパレート最適な状態から大きく逸脱する。

つまり、広域的外部性があっても、市場の取引の場としての機能は失われず、経済活動は依然として続く。しかし、パレート最適な配分を達成するという機能は失なわれている。これが広域的外部性のある場合の「市場の失敗」になるわけです。これが黒板の(4)である。

間占：そうです。大体そういうところと思います。

森々：だけど、そういう問題は社会的ディレンマと呼ばれてゲーム論的に研究されているんじゃないのかな。わざわざ市場均衡理論に戻らねばならないようには思えませんが。

間占：それがそうではないんです。僕が問題にしたい所が大分はっきりしてきました。

確かに、経済学の現状は、環境問題を社会的ディレンマとして捉えています。しかし、背景には人々の経済活動が原因としてあり、さらに市場機能が社会的ディレンマを増幅することもあると考えられます。

森々：えー、市場機能が社会的ディレンマを増幅するというのはどういうことですか。

間占：市場機能が広域的外部性を増幅する例として、「共有地の悲劇」を考えてみます。<sup>8</sup>

例えば、ある漁場に多くの漁師がいるとします。各漁師の取り分は魚資源の総量に殆ど影響を与えないので、自分の漁船で獲れるだけ獲ってしまったほうがよい。しかし、すべての漁師が同じようにすれば、魚資源はすぐに枯渇してしまう。

これが「共有地の悲劇」の基本的構造で、魚資源でなくとも他に様々な問題が考えられます。だから、これは社会的ディレンマの良い例になるわけです。

ここで外部性というのは、漁場の魚資源と考えます。それが広域的であるというのは、その漁場が各漁師にとっては十分広いということです。

---

<sup>8</sup> 「共有地の悲劇」のゲーム論的説明については『新ゲーム理論』(鈴木光男著、勁草書房(1993))の第1章を参照。

森々：市場による増幅というのはちっとも出てきませんが。

間占：うん、ここまでは「共有地の悲劇」の標準的説明です。市場の問題はこれからです。

いま「共有地の悲劇」で魚資源が減ってきたとします。その魚の値段はどうなると考えられますか、森々君。

森々：魚の種類によりますが、その魚が結構おいしく皆が喜んで食べているなら、供給が減れば値段は上がるでしょう。えーと値段の上がり方は市場需要関数の形状、特に価格弾力性によるのか。

間占：そうですね、食料品だから需要の価格弾力性は大きいとしてください。

森々：すると、その魚の供給が減ってその魚が希少になり、価格が非常に高くなるのかな。

間占：それで良いと思います。初めは価格は安いですが魚は沢山とれました。しかし漁師達が沢山とるせいで全体の漁獲量は段々減ってきて、その分魚の価格が上がります。漁獲量は小さくなくても価格が上がるせいで、利潤は依然として上がる。だから漁師達は漁を続ける。そして、最終的には資源が完全に枯渇してしまいます。

新月：そういう例はいくらでも考えられますよ。例えば、昔は数の子は安かったんですが、随分と値段が高くなった。最近では外国からの輸入品が増えてまた安くなったようですが。

森々：いつ頃の話をしているんですか、先生。

新月：ニシンが沢山とれたのは昭和20年代ですよ。

森々：僕の親が生まれたころか。先生はそんな昔のこと覚えているんですか。変だな。

まー、いいや。僕もひとつ考え付きました。ワシントン条約で輸出入が禁止されている動物なんて、良い例かな。

間占：問題になっている動物が希少になり、狩猟や取り引きが禁止されてもヤミでの価格が高いので密猟が行われ、個体数が減ってその動物は益々希少になり、価格は益々上がってしまう。

こういう例はいくらでもあるわけです。現在の環境問題の多くが、その背景に経済活動があり、経済活動によって出てきている問題を市場機能は増幅していることが多々あるわけです。

一方、経済学の市場均衡理論に話をもどすと、いまだに市場均衡の存在定理とか厚生経済学の第一定理とかの数学的精緻化と一般化を行っています。

森々：すると、現在の地球規模の環境問題などは市場均衡理論が取り扱うべき問題だと、間占さんは言いたいわけですか。

間占：そうだと思います。今まで述べた環境問題などを正確に理解するためには、それらの背景にある人々の経済活動と市場機能を正確に理解する必要があるはずですよ。

だから、ゲーム論的分析だけではなく、市場均衡理論が広域的な外部性を含む形に拡張して、それを使って現在の環境問題などを研究すべきだと思います。

一般論として、市場均衡理論はもっと社会経済現象の分析に使われるべきですよ。

新月：間占君が言いたいことは分かってきました。

いま地球規模で起きている環境問題の原因が、実は人々の経済活動であり、その経済活動で引き起こされる問題は市場機能により増幅される。ところが、市場均衡理論だとかシカゴ学派の経済学は、ノウテンキにもいまだに市場に任せておけば効率的に社会問題は解決すると信じている。

ただシカゴ学派の場合、市場経済至上主義の「市場」という言葉は相当広い意味、例えば、さっき議論に出た「洗濯屋と隣のパン屋」の例での当事者による交渉などまで含んでいるようにも見えます。つまり内容をあまり明確にしないで使っていますから、ここでの議論をシカゴ学派に適用するときは注意が必要です。

間占：その注意は分かりました。いずれにしても、まずシカゴ学派のような市場経済至上主義はやめるべきだと思います。

むしろ市場均衡理論は、現在の諸々の環境問題などを分析する理論として重要になるはずですよ。だから、厚生経済学の第一基本定理なんて言うものは、もし広域的な外部性がない場合のひとつの簡単な定理ぐらいに位置づけるべきですよ。

新月：間占君に大賛成。

市場経済は環境問題などを通して地球全体を襲っている。本来はそういう問題を分析する理論としての市場均衡理論の現状は、理論家が数学的精緻化や一般化だけを行なって、何でも市場に任せておけば良いとする市場経済至上主義なんていうノウテンキな状態に陥っている。だから、市場均衡理論は環境問題などに笑われている。

森々：間占さんの疑問というのは分かりました。しかし、それで何を悩んでいるんですか。だって、間占さんの説明は首尾一貫しているんだから、間占さんが考えているように、

環境問題とか市場均衡理論を研究すればいいんじゃないですか。

でもその場合、ゲーム論を忘れなければならないのかな。間占さんはそれで悩んでいるんですか。

新月：森々君、確かにその通りだと思いますが、そういう研究をするのは現在の経済学会の流れに逆らう覚悟が必要なんです。そういうやり方で結果がすぐに出れば良いが、実際は新しい考え方を追究するには非常に時間がかかるし、新しい考え方で成果が出るかどうか分からない。だから、方向として良いことは確かであっても、新しく大きな問題に挑戦するにはそれなりの覚悟が必要なんだ。

間占君は現在学会でゲーム論を中心に研究で売り出し中でしょう。だから成果が上がらない可能性のある、あるいは成果が上がっても非常に時間がかかる新しい市場均衡理論に挑戦するかどうかで悩んでいるんですよ。

間占：新月先生の言う通りです。こういう場合どうしたらいいんでしょうか。

新月：以前に二人は、「どんな災いが予感されようが、そこにある真理を追究するのが、僕たちのような崇高なる精神を持つものの、選択の余地の無い選択なんです」とか言ったんじゃないのかな。

森々：たしかに言いました。

それで新月先生は若いときは多くを期待されていたと聞いていますが、そういう大事な問題に挑戦していて、まだ成果が上がらないんですか。

間占：おい、おい、先生に失礼ですよ。

新月：まー、いいですよ。でも、そのうち二人に逆襲するから、いまにみておれ。

大分長い話だったので、この辺でお茶でも飲みましょう。その後少し事務的なことを済ませますので、この後の議論は4時からにしましょう。

(ナレーター)：[そうなのですか、市場均衡理論というのは結構大事で、理論としての可能性もあるんですね。私も市場均衡理論を真面目に研究しないとイケない。

ところで、第三幕では完全競争市場の認識論的問題を議論するようです。どういう問題があるんでしょうね。では、聞いてみましょう]

### 第三幕：「完全競争経済」の認識論的考察

（新月、ゆっくり話し始める）

新月：さて、間占君の話は終わったので私の番だ。

市場均衡理論は、特に「完全競争経済」という観念は認識論的にも社会制度論的にもおもしろい代物なんですよ。なぜなら、それは幾つも矛盾を内包しているんですから。まず、これからの議論がどのような性格のものかについての注意から始めます。

ソビエトを代表する多くの共産主義国家が崩壊した後の1990年代には、社会経済制度を考えると時の思想・観念として「完全競争経済」あるいは「自由競争」が支配的になりました。この考え方はアメリカの社会経済を支配するだけでなく、いまや世界中を支配し始めています。例えば世界銀行やIMFなどで政策立案する人達の中には、アメリカの大学の大学院で経済学を勉強した人達が多くいます。こういう人達の思考の基礎に「完全競争経済」とか「自由競争」という観念があり、これが彼らの仕事を通して世界中の社会経済の運営に影響するわけです。

経済学を含めた学問一般の研究・教育の問題として、ある思想や観念を部分的に研究したり教えたりするのはあまり難しいことはありませんが、その思想の適用範囲とその限界を正確に考えながら研究したり、教えたりするのは難しいことなんです。特に「完全競争経済」のような大きな観念は、その限界を正確に認識するのは難しい。さらに教わる方にとっては、習っている思想や観念の限界なんて仲々理解できるものではありません。

森々：そりゃそうですよ。下手くそな先生が、教えている事の限界の話ばかりしてたら、学生はちっとも勉強する気がしませんから。だから、先生は教えている事が役に立つんだと教えるでんしょう。

新月：そのとおり。だから、大学院で経済学を勉強した人達の多くは教わったことの限界を吟味することなく、既存の経済学を良しとして仕事を始めるわけです。彼らは教育された思想や観念を基礎にして考えるわけです。もっと極端に言うと、教わった観念だけが彼らの言語になってしまう。

えーと、これは我々一般の問題であること、さらに重要な点として、既に自分が信じている事に合わせて観察事実すら修正・改竄してしまう傾向を我々は持っています。これは、前に「蒟蒻問答」や「羅生門」を議論したときに指摘しました。だから、獲得した思想や観念というものには相当の注意が必要なんです。

間占：それも分かりますが、それは一般の話で、アメリカの大学院教育の場合において、それが特別な意味を持つんですか。僕はアメリカで大学院教育を受けているのでちょっ

と気になります。

新月：うん、アメリカでの経済学教育の影響というのは注意する必要があると思います。もちろん程度問題の話ですよ。

アメリカでは「個人主義」と「自由競争」への信仰が強いという背景があり、そして、大学院教育も学生も教師も厳しい競争にさらされています。これは良い側面と悪い側面があります。良い側面というのは、学生も教官もよく勉強・研究をするということです。しかし、学問を反省的に考えること、つまり、その限界を考えることが出来なくなるという悪い側面があります。競争的な状況ではあまり時間がかからず早く成果があがることのほうが大事になるわけです。

だから、アメリカの大学院の教育ではいかに早く成果をあげるかが重要で、そこでは「完全競争経済」の観念の限界なんてものは教えないし、議論もしない。

間占：うん、確かに、僕が受けた大学院教育では「完全競争経済」の限界なんて議論したことはありませんでした。そんなことを考えていたら論文は書けなくなってしまいます。

新月：まー、個人のことは良しとして、その問題を続けましょう。

経済学者達が既存理論の精緻化や単なる数学的一般化ばかりに精をだすあまり、市場経済理論を構成している概念の吟味を怠り、その結果として市場均衡理論に意味のある発展がなくとも、それは研究が無益・無駄になるだけです。しかし、「完全競争経済」あるいは「自由競争」といった思想・観念は、実社会の制度を動かして大変な害悪を与える可能性があります。

ですから、市場均衡理論を本来の形で発展させる目的のためにも、「完全競争経済」を吟味するだけでなく、「完全競争経済」という観念を徹底的に追求してみることは有益です。これによって、実社会の社会経済制度を設計するときに予想される弊害を、少しでも未然に防げるかもしれません。

森々：へー、そりゃ大変そうだ。どうも先生はまた逆転を狙っているんじゃないかな。

間占：先生、その話は僕のこれからの研究の進路を選ぶのに重要なことなので、逆転なんて狙わないでください。

新月：分かりました。真面目に話します。

ただ、注意して欲しいのはこれからの議論は、「完全競争経済」が適用できる経済現象とは何かを考察するものではありません。社会経済全体が「完全競争経済」のようになるとどうなるかという事を考えるんです。「完全競争経済」という観念だけが頭にある人達

が社会経済制度を設計すれば、社会はそういう方向に進んでしまう可能性があるからです。

さて色々話さねばなりません、具体的にはどこから始めればいいのか。

森々：先生の長い話に入る前に僕が気が付いたことから聞いておきたいんですが。

えーと、この間、「菟弱問答」を話題にしたとき、ゲーム論での完全情報と完備情報の仮定を議論しました。<sup>9</sup> その後、『経済セミナー』誌の完全競争に関するある記事を読んでいたら、「完全競争経済」に関するひとつの認識論的な問題に気が付きました。

新月：何に気が付いたんですか。

森々：完全競争市場の成立要件として、さっき議論に出た「主体の数が多い」などの仮定の他に、「完全情報」という仮定が必要と書いてありました。僕にはこの「完全情報」という仮定が全く理解できません。

新月：あー、それは私の話と関係しているので、それを先に議論するのは都合がいいですね。多分、そこでは「完全情報」という用語の説明は与えられていなかったんですよ。

森々：そうです。「完全情報」という仮定が、その経済で何を意味しているかの説明が全然ない。

「完全情報」という仮定をゲーム論の完全情報と同じ意味とすると、経済が繰り返される状況がまずあり、毎回の取引の後に全員の取引結果が各人に分かるという事になります。

間占：そこでの「完全情報」というのは、展開形ゲームや繰り返しゲームの意味での完全情報ですね。<sup>10</sup>

森々：ところが「完全競争経済」であるためには、「主体の数が多い」という仮定が別にある。大きな経済で一人一人の経済行動の結果をすべての人が観察するなんて変ですよ。

新月：それにあの Folk Theorem が教えるところでは、そういう完全情報の社会での繰り返し状況では、どのような結果も起きる可能性がある。<sup>11</sup> 逆に個々のプレイヤーの行

---

<sup>9</sup> 第二曲：菟弱問答とゲーム論。

<sup>10</sup> 展開形ゲーム理論の用語に厳密に従うと、これは完全情報でなく、完全観察 (Perfect Monitoring) という仮定である。

<sup>11</sup> Folk Theorem に関しては、岡田章著「ゲーム理論」(有斐閣、(1996))を参照。

動は他の殆どのプレイヤー達には観察されることがないと仮定すると、Anti-Folk Theorem が成立する。これがむしろ完全競争状況のための情動的仮定なんですよ。<sup>12</sup>

つまり、個人は殆ど無名であるという意味において、「完全競争的経済」は大都会と比較すべきなんですよ。

森々：あれ先生は、前に Folk Theorem はどうしようもない定理だと言いませんでしたか。

新月：あの標準的な形、つまり、各プレイヤーが事前の立場から計画するという形で考えると、Folk Theorem は大きな概念的問題を含みます。しかし、ずっと制限した形で理解すればいいんですよ。各個人の行動が他の多くの人達によって観察される場合には、個人的逸脱に対しての村八分のような罰則が組み込まれた形で社会習慣が形成されることがあります。このような場合、その社会習慣はその社会の歴史に対応するわけだ。そのような社会習慣は非常に多くの形態を取る可能性がある。これが Folk Theorem の肯定的立場からの解釈です。

Anti-Folk Theorem も同じように制限して理解します。大都会では、各個人の行動はほんの僅かな人達にしか観察されない。この場合、罰則は有効に働かない。だから、大都会で個人は自由に行動できる。Anti-Folk Theorem が主張しているのはこういう事なんです。そして、これが「完全競争経済」のための情動的条件でもあるわけです。

森々：僕はまだ Folk Theorem と Anti-Folk Theorem を十分に理解してないので、関係する文献を読んできますから、また詳しく教えて下さい。

それで市場均衡理論での「完全情報」の仮定というのは、ゲーム論でいう完全情報ではないんですね。

じゃ、ゲーム論で言う完備情報という仮定を考えてみます。えーと、つまり各主体は経済の構成員の効用関数や企業の生産技術の可能性を完全に知っている。あれ、多人数の経済を考えている場合、この仮定は完全情報の仮定よりもっと現実ばなれしているか。

新月：でも、その現実ばなれしたストーリーで完全競争を理解しようとするのがいるんだね。静学理論の経済というのは経済が一回だけプレイされるのではなく、背景に繰り返しがあつて、その繰り返し状況における定常状態を考えています。これを午前の議論の最後に注意したわけです。

経済が本当に一回だけしかプレイされないとし、そして各主体が市場均衡理論を解くかのように取り引きの計画を立てるとします。この場合、各主体は経済をすべて知つていて、取り引き計画を計算するという考え方が可能です。ただ、この考え方は市場均衡

---

<sup>12</sup> Anti-Folk Theorem に関しては以下の論文を参照：M. Kaneko, "Some Remarks on the Folk Theorem in Game Theory," *Mathematical Social Sciences* 3 (1982), 281--290.

理論を紋切り型に解釈して出てきたもので、全くとって付けたようなものです。市場均衡理論の数学的定式化に到達するまでの捨象と抽象化のプロセスを認識していない。そういう意味で、真面目に取り扱う必要はありません。ただ合理的期待形成の理論の教科書的説明はこの考え方の延長線上にあると言えます。だから、私の注意もそんなにバカバカしくはないんですよ。

森々：じゃ、『経済セミナー』の記事にあった「完全情報」という仮定は何なんですか。

新月：じつは私も昔、市場均衡の「完全情報」は何だか変だと思い、幾つかの教科書を調べたことがあります。そこで書かれているのは、各経済主体は市場価格が分かり、財の質も分かっているということぐらいの意味です。<sup>13</sup>

森々：価格が分かっているとか財の質が分かっているなんて、経済が何回も繰り返されれば自然と成立するんじゃないですか。多分、そんな仮定は改めて言う必要もないんじゃないかな。うーん、何か少し違うかな？

新月：その通りです。さらに「完全情報」という仮定を勝手に解釈してしまう人もいるんだから、完全競争市場の成立要件としては言わないほうが良いと思います。

森々：少なくとも、先生の解釈に従えば「完全情報」というのはあまり意味のない仮定だということか。あるいは経済の本来の状況をもっと丁寧に記述すればよいんですね。

じゃ、僕が「完全情報」はなんだか変だと思っていたのは正しかったんだ。

新月：そうだと思います。

じつは私が話そうとしていた「完全競争経済」の認識論的側面というのは、今議論したことなんです。さっき出てきたゲーム論の意味での完全情報という仮定の反対の極にある状態が成立要件だと、私は議論するつもりだったんだ。

「完全競争経済」の成立要件として、「個人は自分の行動が経済全体には全然影響しないと考える」というものがあります。この要件は情報的にも必要なわけです。つまり、個々人の行動を観察できる人々は経済全体と比較したときにやはり無視できる。これを「情報的匿名性の条件」と呼びます。

間占：ちょっとまとめてみます。

ある個人の行動を他の多くの人々が観察できるならば、その個人が多くの人々に影響

---

<sup>13</sup> 「価格理論Ⅰ」(今井賢一他著、岩波書店、(1971))の第3章を参考。

を与える可能性があります。もしかしたら価格に影響を与えるかもしれない。これは「完全競争経済」の仮定に反します。ですから、非常に有名な人の行動は情報を通して社会全体を変化させる可能性があります。

逆に、僅かな人達にしか行動が見られていなければ、社会全体に影響を与えることはできないが、社会からも制限されなることもないので、その個人は自由に行動できます。この場合、各個人は権利としての自由だけでなく、実質的な自由も得られます。先生が「完全競争経済」と大都会を比較したのはこれが理由ですか。

新月：その通り。

ですから「完全競争経済」では、各個人は情報的に匿名である。自分は多数の人には見られていないし、自分が顔を会わせる相手は経済全体のほんの一部である。他人に観察されない自由がある。

さて、森々君、この情報的匿名性が成立しない現実の例を考えられますか。

森々：何だろう。個人の行動が多くの人々に観察されるんだから、それは長島茂雄みたいな人ですか。

新月：私はアントニオ猪木を考えていたんですが、確かに長島茂雄のほうが有名人の代表ですね。

それで「完全競争経済」という観念を追求していくと、そこには「有名人」があっても困る。経済全体と比較された場合、すべての人が情報的に匿名である。だから、本来は「金持ち」の存在があっても困る。「金持ち」は匿名性を否定する可能性もあるし、「金持ち」は益々「金持ち」になることも考えられる。すると価格への直接的影響も出てくるかもしれない。従って、「金持ち」の存在は情報的な匿名性を否定するかもしれないし、価格への直接的影響力も持ちかねない。「金持ち」の存在の問題点に関しては、多くの人が語っているのでここでは議論しません。

森々：先生は何だか勿体ぶっているみたいだけど、早く結論に行ってください。

新月：じつは「完全競争経済」の成立要件としての「多数の主体」という仮定をもう少し強くしておく必要があります。それは「各人に多数の競争相手がいる」です。これは多数の人間がいるという仮定に殆ど含まれているとも考えられますが、一応これをはっきりと言っておきます。

森々：それは「多数の主体」という仮定と同じに聞こえますが、それでそろそろ何処に行きたいのか聞きたいのですが。

新月：私の結論を簡単に言うと、「完全競争経済」は我々の伝統文化と相容れないし、さらにそれは我々の価値観の多くを否定するという事です。

まず芸術を考えてください。芸術というのはすぐれて個人的・個性的なものです。優れた芸術はさらに個性的なもので、その数少ない存在が価値を持つのです。例えば、音楽家ならばモーツァルトとかバッハを、絵描きならばセザンヌやゴッホを思い描いてください。同じことは学術でも成立します。本当に価値のある学問というのは一握りの人達によって創られることを。

森々：文学者ならトルストイとか赤塚不二夫ですか。

新月：そうだ、森々君、それでいいのだ。

「完全競争経済」の情報についての匿名性の仮定を思い出してください。そこではこのような飛びぬけて個性的な活動をする人達の存在は認められない。「自由競争」において個人主義や個性が大事であるといっても、そこでの個性というのは、他の人達でも頑張っても真似れば代替可能になってしまう程度の個性なんです。つまり、それが「各人に多数の競争相手がいる」と言う仮定です。

したがって、「完全競争経済」では、真に個性的な芸術・学問は許されない。

さらに、「完全競争経済」では伝統的社会的束縛とも相容れない。なぜなら、社会の伝統や慣習は経済行動の実質的自由に束縛を与える。従って、社会には伝統的な美徳、例えば、友愛、誠実、信頼、勤勉、なども許されない。

間占：えーと、その社会では個人の経済行動の自由は法的に保証され、しかも社会慣習からも自由であります。この意味で非常に自由な社会ですが、社会全体から見たとき、極めて優れた芸術や学問があっては困るという事ですか。

しかし、それで平等が保たれるのならば仕方ないじゃありませんか。

新月：じゃ間占君、極めて優れた芸術や学問もなく、伝統による美徳もない社会での、個人の価値観っていうのは何なんだろうか。

間占：優れた芸術や学問もなく伝統による美徳もない社会での個人の価値観というと、えー、残るは遺伝子に支配されるものですか。つまり、生存と子孫繁栄のための物質的満足ということになるわけですか。

新月：そう、そこでは物質的満足だけ、財の物質的消費が支配する社会。そこでの消費者の効用はまさに生理学的効用だけからなる。

この場合、経済学の中で厄介な問題である“効用”とは何かと言う問題に対して、それは“生理学的満足度”と答えることが出来るんです。ですから、これでひとつ厄介払いが出来たわけだ、ははは。

間占：参りました。経済学は人間社会の学問でなく、本来の意味の進化論的生物学になってしまいます。

森々：全くひどい話だ。これじゃ経済学を勉強する気がなくなってしまう。

新月：そんなに気落ちする必要はありませんよ。ここでは「完全競争経済」いう観念を徹底的に追及するとどうなるかを議論したのです。これに対して「完全競争経済」というものが社会経済すべてを支配するものでなく、経済現象の一部を捉える手段と考えれば、それは制度的にも学問的にも依然として非常に有効のものだ、と思います。

ですから「完全競争経済」を、一般理論でなく特殊理論として捉えればよいわけです。

森々：本当なのかな。先生が信じられなくなってしまった。

新月：そろそろ予算制約に従った買い物に行く時間です。

「完全競争経済」の社会制度論的側面は明日の午前中議論しましょう。明日の一時間目は私も間占君も講義があるので、10時半からという事ではどうでしょう。

間占：結構ですよ。さて、僕は明日の講義の準備をしないとイケません。

森々：僕は特に何もないので大丈夫です。でも少し灰色の気分になってしまった。

(ナレーター)[どうも新月氏は学問の裏側ばかり見ているようですね。第二幕のようなもう少し夢のある話を聞きたいと思います。でもあれも地球規模での否定的問題に関して、学問としての経済学の肯定的可能性だったんですか。だから、夢のある話は半分なんですか。森々君じゃないけど私の心も灰色になってきてしまいました。

まあ、明日の朝の楽しい話を期待しましょう]

## 第四幕：「完全競争経済」の社会制度論的考察

（新月と間占が講義を終え研究室に帰ってくる）

森々：おはようございます。講義はいかがでした。

間占：おはようございます。まー、いつもの通りですよ、新月先生はどうですか。

新月：おはよう。講義ですか？ どうもノルマが果たせません。微積分は少しはノルマを果たさないと他の先生達から叱られるので、脱線を少なくしないといけない。

森々：どう脱線をしたんですか。

新月：えーと、関数の連続性を例のイプシロン＝デルタ論法で定義したんですね。それで学生に理解したかと聞いたら、「全然分からないのでもう少し直観で分かるように説明してくれ」と言うんですね。それで「直観とはなんだろうか」という事になってしまって、それで直観をどう考えれば良いかの議論をしてしまったんだ。そしたら結局、直観というものを経済理論家は希少財として取り扱っていないのではないかという結論に行ってしまった。だって、経済理論家はすぐに自分の経済的直観に照らすとアーだコーだと言うでしょ。どう思います？

間占：先生、ここでも脱線するつもりですか。今日は昨日の議論の続きをするんですよ。

新月：あー、そうか。それで今日はどこから始めるの？

森々：えーと、昨日は間占さんの市場均衡理論の否定的見方と肯定的見方の両方の話から始まって、新月先生は「完全競争経済」という觀念の認識論的考察を与えました。最後は殆ど動物の社会みたいなところに行っちゃって、それで今日は「完全競争経済」を社会制度論の立場から追求すると言っていたと思います。

新月：そうか、今日は「完全競争経済」を社会制度論の立場から追求するのか。

それは「完全競争経済」を達成するための社会制度を考えるということですよ。どうも直観とは何かの方にまだ頭が行っていて調子がでません。間占君、問題を思い出すためのキーワードをください。

間占：昨日の議論では、厚生経済学の第一基本定理を社会制度論的に解釈したとき私的所

有権という言葉が出ました。それがキーワードになりますか。

(新月、ラップ調で話し始める)

新月：そーか、私的所有権か、それでどうしたの。

私の頭は機能停止の状態だね。頭の機能停止というのは、「思考の失敗」なんですか。ウン、少し字を変えて、昨日議論した「市場の失敗」にしてみよう。それを言いかえると、市場の機能停止だぞ。間占君に従えば、キーワードは私的所有権だ。私的所有権が機能停止になってしまう場合もあるのか。やっど、私の頭が機能し始めた。もう少しウォーミングアップをしよう。

私的所有権が機能停止とはどういうことだ。それは他人が所有権を侵犯することだぞ。すると私的所有権を正常に機能させるには、どうしたらいいんだ。そうだ警察に頼んで、守ってもらえばいいんだ。だけど警察というのは、昨日の議論には出てこなかったぞ。それも「完全競争経済」の中で考えればいいのか。

(新月、普通に近い調子にもどり)

よし、大体思い出してきました。どうも私の直観というのは仲々うまく機能せず、少し言葉遊びでウォーミングアップをしないと正常に機能しません。だから私にとっては直観というのは希少財なんです。それで直観とは何かについて、授業で議論したんですよ。

間占：先生がまた直観について話し出す前に、私的所有権について議論を始めてしましましょう。

(間占、少しラップ調で)

私的所有権を遵守させるには、警察権力が必要だ。それを経済のなかで考えるには、警察が与える法律の遵守というサービスを公共財として考えることだ。

どうも新月先生みたいにはリズムに乗れませんね。

新月：そうだ、警察は公共サービスだ。

やっど、私の言いたいところまできた。

森々：えー、もう言いたいところまで来たんですか！ いつもと比べて随分と早いですね。それならいつもラップ調でやって貰いたいな。それで先生が言いたいのは何ですか。

(新月、段々いつもの調子にもどる)

新月：政府は公共サービスを供給する。警察は政府の一部であり、「完全競争経済」を達成するには警察が私的所有権を守る必要がある。ただ公共サービスの裏側には、そのサービスを供給する人々がいます。つまり、公務員です。その人達の給料はどうするんです

か。

森々：そりゃ、公務員だって給料を貰わねば生きて行けませんよ。

間占：森々君、先生はその財源はどうするのかと訊いているんですよ。

新月：おっしゃる通り。それで、その財源はもちろん税金という形で徴収するわけだ。

私的所有権を遵守させるためには警察はあり、そして警察がなくなれば私的所有権は無いと同じだ。しかし、政府は個人の私的所有権を侵して税金を徴収するのだ。だから、税金というのは政府による私的所有権の否定になる。しかし、税金無しでは、警察権力を保持することは出来ないから、無法社会になり、私的所有権はやはり否定されてしまう。

間占：そうか。「完全競争経済」を成立させるためには、私的所有権を守る必要がありますが、そのためには私的所有権を侵して税金を課さねばならないということですか。つまり、「完全競争経済」は初めから矛盾要因を内包しているということですか。

森々：でも警察は税金をとって、その後は人々の私的所有権を遵守するだけのものとすればいいんじゃないですか。

新月：それは問題だな。やはり警察官も経済主体と見なすべきでしょう。

この場合、税務署を含んだ警察の存在を「完全競争経済」の他の条件との関係で考える必要があります。例えば警察の存在は、昨日議論した匿名性の条件を否定する可能性がある。つまり、税金を正確に徴収するには、各個人あるいは各生産者の所得を正確に捕捉しなければならない。すると、警察あるいは税務署は各個人の経済行動を正確に知らねばならない。つまり、匿名性の条件が成立しなくなるわけです。

森々：昨日の議論では、個人の経済行動が直接的にも情報的にも社会全体への影響力を持ってはいけないということでした。すると一人の個人を観察する人間が僅かであれば良いんじゃないじゃありませんか。

新月：たしかにその通りです。ただ、「各個人を観察するのは僅かな人間である」という可能性を追求するととんでもない所に行ってしまうよ。

ある人の経済行動を僅かな人達が観察する。ところが観察している人も他の僅かの人達に観察される。もちろん、ここで誰が観察しているかは観察される方には分からないとします。だから、警察には情報が集中する中央機関があっってはいいけない。

これを突き詰めていくと、誰もが僅な人々によって観察されているが、誰に観察されているかは分からない。もちろん、観察する人達と観察される人達というネットワークに最終的な人間などはいない。そして、この網の目の関係が社会全体を覆ってる事になるわけです。

森々：えーと、誰もがいつも誰かに見られている。そりゃひどい社会状態だ。僕はそんな社会に住みたくはないね。

新月：この状況を昨日の最後の結論と組み合わせて考えてみます。

「完全競争経済」という観念を追究していくと、優れた芸術・学問など強い個性を必要とするものは許されない、伝統とか慣習などの個人の経済的自由を制限するものも許されない、しかし、私的所有を守るための税収のために各個人が僅かな人数の人達からいつも監視されるが、誰に監視されているのかは分からない。しかし、そのネットワークはうまく社会全体を覆っている。

それはまるでジョージ・オーウェルの『1984』の世界みたいなところですよ。<sup>14</sup> すべての人が Big Brother に監視されているが、Big Brother の裏側に誰がいるかは誰も知らない。『1984』では更に、社会制度に疑念を抱かないように、批判的概念そのものを消去するように言語の中から批判的意味のある言葉をすべて削除する、と続きます。これこそ昨日の議論で行き着いた「完全競争経済」の状態を implement する方法になるわけです。

間占：なんだか極端な統制経済みたいに聞こえますが。そこでは個人の経済的自由を確保するため、個人の他の自由を殆ど犠牲にするんですか。それで「自由競争」になるんですか。

今の結論と昨日の最後の結論と合わせると、人々は物質的消費による効用を目指して自由競争をするが、同時にその社会は他の側面、つまり、伝統、文化、芸術、学問などは極端に制限されている。これは人間社会ではありませんね。

新月：いやー、構成員が人間ならば、それは定義によって人間社会ですよ、ははは。

こういう社会での個人の生活はどういうものと考えられますか。

森々：まず言えることは、そういう社会では個人は孤独でしょう。だって、知り合いの多くは競争相手でしょ。

---

<sup>14</sup> 『1984』ジョージ・オーウェル著、新庄哲夫訳、早川文庫480（1972）。

新月：大都会で人々が孤独であるように、そこでは人々は孤独と思います。

間占：先生の説明に従えば、文化、芸術、学問が犠牲にされるわけですから、文化的に貧しいのは定義から確かですけど、それだけでなく、そのうち経済活動だって低下し社会は物質的にも貧しくなるでしょう。

森々：孤独で貧しかったら全く悲惨ですね。

新月：そして、子孫繁栄の欲望に支配されているんだから、人口は益々増えます。だから、昨日間占君が議論した環境問題は益々ひどくなる。環境を問題にして、個人の経済的自由を制限しようとするのは「完全競争経済」に反する。そしてそのような運動の指導者も「金持ち」と同様そこでは許されない。だから、そこでは誰もが自分自身の子孫繁栄のためだけ働き、環境を問題にするような運動も起きない。そもそも、そういう「指導者」や「環境問題」なんて概念は言語の中から既に取り除かれている。

そうすると、そこでの平均寿命は短くなるはずである。

さて森々君、ここでの人々の生活はどういうものかまとめてください。

森々：えーと、そこでは人は孤独であると言いましたよね、それから、貧しいとも、また悲惨だとも、最後に、そこでの平均寿命は短いと言いました。うーん、全くひどい社会ですね。

新月：まとめてくれてありがとう。「完全競争経済」という観念を徹底的に追究したときの結論は、簡潔に表現して「そこでの人間の生活は孤独で貧しく悲惨でしかも短い」。

間占：あれ、それはどっかで聞いた事のある言葉ですね。

新月：ホッブスの『リヴァイアサン』の自然状態はこうなると言う言葉です。<sup>15</sup>

間占：えー、『リヴァイアサン』の自然状態は完全な無法状態の記述だったと思いますが、それが「完全競争経済」の行き着く先になるんですか。あまりに強引な結論に聞こえます。

そこでは人々が孤独だろうというのはよく分かります。

---

<sup>15</sup> 『リヴァイアサン』、トーマス＝ホッブス著、永井道雄訳、中央公論社、世界の名著（1971）。

森々：どうも生活が楽しくなさそうだというのも良く分かります。

新月：だけど間占君も森々君も私の論理展開を手伝ってくれたんじゃないですか。

間占：しかし今回の問題に関しては全体をもう少し丁寧に議論すべきだと思います。どこがおかしいと思いますが。

それで先生は現在の世の中がそういう方向に進んでいると考えているんですか。

新月：現在の社会では様々な形で「完全競争経済」からの逸脱要因がありますから、あまり心配しないで良いと思いますよ。

例えば、一部の企業が市場を独占したり、政府とうまく手を結んで社会経済を支配しようとしている。情報化社会が進んで、匿名性は全然成立しなくなるだろうし、プライバシーだってどうなるか分からない。政府と一部の企業が背後にいる Big Brother によって、残りの殆どの人が監視される。さらに一部の金持とか成功した人たちは益々金持ちになりますよね。

このように、「完全競争経済」が成立しなくなる要因が増えているんですよ。だから、心配しなくて大丈夫です。

森々：それじゃ「完全競争経済」の状態と同じように悪いじゃないですか。

結局、「完全競争経済」が成立しても成立しなくともひどい状態になるわけか。救いようがないじゃないですか。

間占：うーん、僕たちはどうしたらいいんだろうか。

それで昨日の問題にした市場均衡理論の可能性の問題についてお聞きしたいんですが。

新月：どうぞ。

間占：先生は市場均衡理論はもうダメだと考えているんですか。

新月：いやー、とんでもない。むしろ正反対ですよ。市場均衡理論ほどよく出来た経済理論は他にないと思っています。ただ、それは社会経済全体についての理論としてでなく、個々の社会現象で市場均衡理論が適用できる範囲に適用するという意味で、特殊なあるいは部分的な理論として捉えればの話です。

ですから、広域的な外部性まで取り扱えるように市場均衡理論を拡張して、環境問題を背景にある市場経済と経済活動と絡めて研究しよう、という間占君の昨日の話には大賛成です。

今日は、市場均衡理論を社会経済全体の理論として考えるとどうなるかという問題を議論したわけです。ですから、特定の理論がすべてを語るなんて幻想を捨て、これからは個々の経済現象への適用可能性を考えながら理論を構成していけば良いわけです。

間占：そうか僕の提案には先生は賛成なんですか。何だか、否定的結論にってしまったのかと思いました。

一般理論でなく特殊な理論を考えるということに関しては、僕は適用できる範囲でうまく働く理論が構成できればそれで十分に満足です。

森々：僕も賛成です。それからどうも文学が経済学に役に立ちそうだということも分かってきました。

ただ、先生の話聞いていて、ひとつ疑問が湧いたんですが。

市場均衡理論の適用可能性を議論するにはどうしたらいいんでしょうか。もしかしたら、どの経済現象に適用できて、どの経済現象に適用できないかを語る一般理論が必要となるのではありませんか。

新月：ははは、そりゃ特殊と一般の再逆転だね。困った。

昨日今日は喋り捲ったので大分疲れた。何か旨いものでも食べに行きましょうや。

(ナレーター)：[結局「完全競争経済」を追究しても追究しなくともおかしな事になるという結論ですか。困りましたね。やはり文人トーマス＝カーライルが言うように経済学は陰鬱な科学なんでしょうか。]

ところで私が大きなカメではないでしょうかと予想したのは、実は怪魚リヴァイアサンだったんですね。私の女の直感も捨てたものではありませんね。

それにやっぱり一般理論が必要なんでしょうか。分からなくなりました。

今回の講演はこれで終了となります。皆様の御清聴を感謝いたします]

(詩人、静かに登場)

アキレスと亀は2500年前に競争を始めた  
アキレスはいつまで走っても亀に追いつけなかった  
もっと頑張れとみなはアキレスを応援した  
アキレスは益々がんばり亀は昔の友を想い昼寝した

(詩人、静かに退場)

[あとがき：本編の制作にあたり、寺尾建氏、鈴木伸江氏、豊谷整克氏、グレーヴァ・藤原貴子氏、広川みどり氏から頂いたの有益なコメントに感謝する。また文章表現を詳細に修正し、筋書きに関しても多くを示唆してくれた中野栄氏に感謝する]